

## 日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討 (二)

——心性本覚思想について——

中 條 暁 秀

(一)

行学日朝(一四二二—一五〇〇)の「本尊抄私記(五卷)・見聞(三卷)」(『朝師御書見聞』所収<sup>①</sup>)を検すると様々な問題が存する。既に、

(1) 日朝は最古の科文といわれる五段の大科に則って、『本尊抄』に注釈を施している。その証左は、自然讓与段の注釈態度によって窺える。<sup>②</sup>

(2) 「私記・見聞」中に引用される経論釈は厖大な量に上る。特に中古天台文献が極めて豊富である点も注目されるが、日朝はただ単に無原則に援引するのではなく、常に文献吟味を心掛けていた。<sup>③</sup>

(3) 「私記・見聞」中には、数法相配釈が色濃い。加えて、「我等衆生形骸全体五輪塔婆形貌也」との言を見ると、『阿仏房御書』・『御義口伝』等と、その基調を同じうするもののように思われる。<sup>④</sup>

等々の考察を試みたので、今は「私記・見聞」八巻中に展開される「心性本覚思想」を一つの手掛りとして、かかる問題を少しく検討するものである。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討 (二) (中條)

(二)

「祖書学」を提唱し、遺文の文献学的研究に新生面を開き、後の遺文研究に多大な影響を及ぼした宗学者が、故立正大学教授浅井要麟(一八八三—一九四二)先生である。周知のように先生の祖書学の特徴は、遺文の真偽論にあって、「祖書の思想的研究」(『日蓮聖人教学の研究』所収<sup>5)</sup>)がある。それは、例えば中古天台は円密禪合談の雜亂教学で、台密義を権実雜亂として極力斥けられた宗祖が、このような思想を取り入れられるはずはなく、宗祖の思想の本質は、中古天台の思想と異質でなければならぬという前提に立って、中古天台に与同的な遺文はすべて偽撰として排除しようとする試みである。この試論は、夾雜物を除き去って、純粹な日蓮教学を樹立しようとする貴い作業であったと思うのであるが、思想内容に検討を加えることによって、真偽を判定しようとする方法は、余りにも冒險すぎるのではないかと案じられるものである。<sup>6)</sup>

心性本覚思想の問題についていえば、浅井要麟先生は、いわゆる八葉九尊の心性の蓮華を説く遺文は偽撰であるとされ、それに属するものとして、『十如是事』(定遺統篇遺文番号一三)・『日女御前御返事』(正篇二五六)・『三世諸仏總勘文教相廃立』(正篇三四八)・『当体蓮華抄』(統篇三九)・『一念三千法門』(統篇一四)・『善無畏抄』(正篇四六)・『忘持經事』(正篇二二二)・『日妙聖人御書』(正篇一〇七)・『日女御前御返事』(正篇二九三)・『十八円満抄』(統篇四〇)等を挙げられ、その理由として、(1)台密を破折された宗祖が、台密教義を取り入れられるはずがない。(2)心性蓮華説と関連する、例えば理体本覚思想・観念成仏論・己身本尊論等のいわゆる本覚思想は、中古天台特有の思想であって、宗祖の標準遺文たる『開目抄』・『本尊抄』等の思想と異なるもの

である。との二点を挙げられている。<sup>(8)</sup>

(二)

「八葉蓮華」とは、我等衆生の肉団心を八弁の蓮華のごときものであると思惟したことから始まる。その典拠は、『大日經』（具名『大毘盧遮那成仏神變加持經』）の「入漫荼羅具緣真言品」に説示され、<sup>(9)</sup>『大日經疏』（具名『大毘盧遮那成仏經疏』）の巻第四に、「即觀自心作八葉蓮花。阿闍梨言。凡人汗栗駄心狀。猶如蓮花含而未敷之像。有筋脉約之以成八分。男子上向女人下向。先觀此蓮令其開敷。為八葉白蓮花座。」<sup>(10)</sup>とある「汗栗駄心」のことで、衆生の心藏（肉団心）をいう。すなわち、『同疏』によれば、衆生の肉団心は仏・菩薩の座であり、八葉九尊の住処であるとするのである。つまり衆生の心性には九尊が在すというのであるから、衆生の当体そのままが本有の仏であるという、理体本覺思想のことである。<sup>(11)</sup>

したがって、密教と法華經との融合を密教によって解釈しようと試みた、円珍（八一四―八九一）の撰とされる『講演法華儀』<sup>(12)</sup>（具名『入真言門住如実見講演法華略儀』）は、法華三昧に入って心中にある八葉の蓮華を觀想するにあるとし、さらに安然（八四一―九〇三？）は、叡山の本覺思想に立脚して、菩提心は衆生本具のものであり、生仏不二のゆえに、密教の所説にしたがって正しく思惟修行すれば、速疾に菩提を實現し得るところに基本的な特色を有する『菩提心義抄』<sup>(13)</sup>（具名『胎藏金剛菩提心義略問答抄』）において、例えば「如来藏、自性清淨心名眞実心。一切衆生、胸間、肉団其形八分。男仰女伏。其色丹赤。是五藏中之心藏也。真言行者觀此八分為八葉蓮。上開三九仏二名心処心。」<sup>(14)</sup>と述べて、八葉心性蓮華の強調が見られる。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討（二）（中條）

このことはやがて、中古天台では盛んに説いて、本覚思想を展開する上での一助としている。例えば鎌倉末乃至南北朝の成文化と目される「身延藏文明三(一四七一)年泰芸入行学日朝門下の円教日意(一四四四〜一五一九)のこと」(書写本)を底本とした、俊範(一一二二)の相伝を静明(一一・心賀(一一三二九)を経て心聡(一一三二九)によって記述された『一帖抄』には、「問云。当体蓮華、実体何物耶。伝云。法界、総体蓮華也。胸中有蓮華」と、当体蓮華の実体を究明して、我等衆生の胸中の蓮華であるとの当体全是を説き、同趣の説述が、時代は少しく下り(南北朝〜室町時代の成立)、尊舜(一四五二〜一五二四)の著とされる『二帖抄見聞』に、「十界衆生皆蓮華、生故。蓮華因果、法門云即身成仏、詮要。開悟得脱、奥藏也。……十界衆生共居三葉蓮華、極一本有胎藏理也。仍円密大事悉極蓮華因果、法門也」とある。

特に鎌倉中期から末期の成立と見られる伝最澄の『修禪寺決』(身延山藏の行学日朝及び円教日意の所持本によれば、その体裁は全四帖からなり、各帖にはそれぞれ題名が記されてある。第一帖は外題・内題ともに「修禪寺相伝私記」、第二帖は外題・内題ともに「修禪寺相伝日記」、第三帖は外題には「大教縁起口伝」、内題には「修禪寺相伝日記」、第四帖は外題・内題ともになく、第三帖の題をそのまま踏襲している。今日これらを総称して『修禪寺決』という。)の第四帖には、「依三經説(『大日經疏』卷四の説)。一切衆生、心間。有三葉蓮華。男子向上。女人向下。至成仏期。設雖三女人。心間蓮速還向上。」とあって、前述の『大日經疏』・『菩提心義抄』等の先例を踏み、等海(一一三四三)が鎌倉末乃至南北朝の成文化と見られる『二帖抄』(別名『相伝法門見聞』一海筆)について康永二(一二三三)等から貞和五(一二四九)年まで、六年の歳月をかけて詳釈した『等海口伝抄』(別名『宗大事口伝抄』)に至ると、「当流、当体蓮華、云事深習也。当体蓮華者。三世諸仏、心蓮台。一切衆生、心法也。衆生、心

法者。八葉肉団。八葉白蓮也。因果不二。權實一体姿也。説頭此法名「法華二也」と、八葉の肉団を以て、仏の心蓮台となして、衆生の当体を本覺の仏そのものと説くのである。<sup>(28)</sup>

#### (四)

心性蓮華について語る日蓮遺文は、上総土氣の本壽寺他四ヶ所に真蹟の断片が散在する、弘安元年六月二十五日の『日女御前御返事』（定遺一五一五・異称『日女品々供養事』、以下異称を用いる。）、真蹟は現存せぬが正篇に収められる、建治三年八月二十三日の『日女御前御返事』<sup>(29)</sup>（定遺一三七六）、弘安二年十月の『三世諸仏総勘文教相廃立』<sup>(30)</sup>（定遺一六九一・一六九二・一六九六）、統篇所収の『十如是事』（定遺二〇三二）、『一念三千法門』（定遺二〇三八）、『当体蓮華抄』（定遺二二三〇・二二三一）、『十八円満抄』（定遺二二三九）等々である。

しかるに、浅井要麟先生はこれらの遺文の他に、京妙願寺外二ヶ所に真蹟の断片が散在する『善無畏抄』（定遺四一三）、内房本成寺外三ヶ所に真蹟断片散在の『日妙聖人御書』（定遺六四四）、及び中山法華経寺に真蹟完存の『忘持経事』（定遺一一五一）の三遺文をも、先生は「胸間の蓮華に托して、心性本覺を説かれて居るのである。」<sup>(31)</sup>との言である。すなわち、『善無畏抄』は「十方世界微塵数の諸仏の御舌は不妄語戒の力に酬て八葉の赤蓮華にをいさせ給き。」「、『日妙聖人御書』は「妙の一字には二の舌まします。釈迦多宝の御舌なり。此二仏の御舌は八葉の蓮華なり。」「、『忘持経事』は「無始業障忽消、心性妙蓮忽開給歟。」とあるのがそれである。しかし、これらをも「心性蓮華」と見なすには、いささか短絡にすぎるのではないか。

いうまでもなく、いわゆる心性蓮華説の淵源は、遠くは善無畏、近くは円珍・安然等に存するのであるから、した

が、宗祖にこの種の表現方法があつても決して不思議ではない。が、純粹法華教學の樹立を念願された宗祖であるから、最初からこのような説は引かぬ、と見るのが最も穩当なように思われるのである。<sup>(32)</sup>

とすると、「宝塔品の御時は多宝如来・釈迦如来・十方の諸仏・一切の菩薩あつませ給ぬ。此宝塔品はいづれのところにか只今ましますらんとかがへ候へば、日女御前の御胸の間、八葉の心蓮華の内におはしますと日蓮は見まいらせて候。」と説示される前述の真蹟断片存の『日女品々供養事』の扱いが、問題とならう。思うに、恐らくかかる表現に至つたのは、日女御前という対告の知的・宗教的レベルを念頭に置くがゆえの、筆の勢いともいふべきものであらうか。

以上の点を種々整理して、結論的にいえば、人界と仏界との相即を説くならば、一念三千論によるのが宗祖の本来の面目であつて、心性蓮華等の密教々々学によるものは、仮に存在したとしても、所詮傍系思想に位置するものと理解すべきであらう。<sup>(33)</sup>

(五)

『金綱集』は身延二祖日向が宗祖の講義を聴講し、また、自ら見聞するところにしたがつて、諸宗破立の大綱を記し、広く經・論・釈・疏の金言を渉獵して、「華嚴宗見聞」・「真言宗見聞」等と名づけ、総括して『金綱集』と題されたもので、古来より身延門流の秘書として重んぜられた有名なものである。<sup>(34)</sup>

この『金綱集』十四卷ある中、身延山に蔵され、日王丸の筆になる第六「真言宗見聞」へ「真言五智四身事」の金胎両部の同異を説く段に、「胎界普光淨月輪中有二本尊形云云、金界歸命本覺心法身常住妙法心蓮台云云、」とあつて、<sup>(35)</sup>

安然の主張のごとくに金剛界三摩地の心地を表示する為の引文として『本覺證』が援引され、<sup>(37)</sup> 続けて「胎界意於自心、<sup>(38)</sup> 八分肉団、<sup>(39)</sup> 八葉蓮華、<sup>(40)</sup> 顯本覺理、<sup>(41)</sup> 金界意於自心、<sup>(42)</sup> 淨菩提心、<sup>(43)</sup> 十六分、<sup>(44)</sup> 大有之、依之觀、<sup>(45)</sup> 月輪、<sup>(46)</sup> 十六分、証本覺理、也云云、<sup>(47)</sup> 又云、八葉肉団、<sup>(48)</sup> 觀白蓮華、<sup>(49)</sup> 者、白色是自性清淨、<sup>(50)</sup> 色故寄、<sup>(51)</sup> 白色、<sup>(52)</sup> 觀之、<sup>(53)</sup> 是八葉肉団、男向、<sup>(54)</sup> 女向下、故且女ヲハ非法器ト云也、雖然、<sup>(55)</sup> 然免成仏之心、<sup>(56)</sup> 時向、<sup>(57)</sup> 上也、<sup>(58)</sup> 是變成男子ト云也、<sup>(59)</sup>」と、金胎兩部の意味を對比する中で、いわゆる八葉心性蓮華説が紹介されている。

とすると、宗祖はこれらの法門を知悉されていたことは勿論であるが、身延での講義においても弟子達にかかることを解説しておられたであろうと推測される。

## (六)

「本尊抄私記(五卷)」・「同見聞(三卷)」八巻中に説かれる心性本覺思想関連について、日朝は『本尊抄』の第十一番問答を注する「私記」第二の「草木発心修行スル耶事」<sup>(39)</sup>に「汗栗駄心」の説明を、同じく第二十番問答を釈する「見聞」巻六の冒頭部分に、<sup>(40)</sup> かなりの紙面を割いていわゆる肉体即仏の意を表明する箇所がある。<sup>(41)</sup>

まず日朝は「汗栗駄心」の説明について、安然の『菩提心義抄』の説を援引して、例えば「菩提心義云、汗栗駄、<sup>(42)</sup> 是真如、<sup>(43)</sup> 実心、<sup>(44)</sup> ……栗駄、<sup>(45)</sup> 是積聚精要、<sup>(46)</sup> 心、<sup>(47)</sup> ……又云、凡人胸中有二肉団、<sup>(48)</sup> 名汗栗駄、<sup>(49)</sup> 其相八分云云」<sup>(50)</sup>とあって、その説を踏んでいる。

二に「尋云就此御本尊、<sup>(51)</sup> 戒定慧、<sup>(52)</sup> 本尊、<sup>(53)</sup> 習様如何」の項で、日朝は本尊を戒・定・慧の三類に分ち、「慧」の本尊を説くところで、「一塔中、<sup>(54)</sup> 釈迦多宝並座、<sup>(55)</sup> 給、<sup>(56)</sup> 是則一切衆生、<sup>(57)</sup> 胸中有三、<sup>(58)</sup> 八葉蓮華、<sup>(59)</sup> 肉団是也、此肉団顯、<sup>(60)</sup> 理智二尊具、<sup>(61)</sup>」<sup>(62)</sup>と、八

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(二)(中條)

葉蓮華説を述べ、続けて「尋云、本迹曼荼羅不同有之耶」の十界曼荼羅説示中で、真言の八葉九尊について記し、さらに「尋云肉団心具三理智二尊、意如何」の中に、「肉団心者指之云己心也、……私云己心直体称妙法蓮華經是也」と、「肉団は己心」、「己心直体は即妙法五字」という一つの図式、いわゆる肉団即仏の意の表現が看取される。

なお日朝には心性本覺関連の日蓮遺文について、語るところはない。

(七)

以上、むすびとして拙稿の要略をいうならば、

(1) 人界と仏界の相即を説くならば、一念三千論によるのが宗祖の本来の面目であって、心性蓮華等の密教々学によるものは所詮傍系の論であろう。

(2) 己心の直体は妙法五字という、いわゆる心性蓮華説に基づいた肉団即仏の意の表明が、日朝には見受けられる。

等が挙げられよう。

(1) 宗全一六卷(一〇三〜三七八)

(2) 拙稿「朝師御書見聞の一考察—本尊抄私記・見聞について—」(三八二〜三八四『印度学仏教学研究』三二—)を参照されたい。

(3) 注(2) 参照

(4) 拙稿「日朝の本尊抄私記・見聞の検討—教法相配釈について—」(四三〜四四『棲神』五七)を参照されたい。



- (5) 一八二～三三五、『日蓮宗事典』(四三七)を参照されたい。
- (6) 浅井円道氏「宗祖と慈覚・智証―要麟先生への疑義」(一九三『大崎学報』一二二)を参照されたい。
- (7) 伝円仁の『諸仏學中要決』(日藏『天台宗顯教章疏二』五八四)に「心性本覺」の用語例がある。
- (8) 浅井要麟氏『日蓮聖人教學の研究』(二七二～二七五)、勝呂信靜氏「宗學上の二・三の問題点」(三七一～三七二『日蓮教學の諸問題』)を参照されたい。
- (9) 大正藏經一八・六(下)・一一(下)
- (10) 大正藏經三九・六二三(上)、七〇五(中)参照
- (11) 注(10)参照
- (12) 『望月仏教大辭典』(一四七五～四七六)、『仏教語大辭典』(九六〇・一一〇七)、『日蓮聖人遺文辭典』(九一八)、『密教大辭典』(一一三二七)、浅井要麟氏前掲著(二六七)を参照されたい。
- (13) 浅井円道氏『上古日本天台本門思想史』(三七五～三九〇・四〇〇～四〇一)、日藏『解題三』(四六～四八)を参照されたい。
- (14) 日藏『天台宗密教章疏一』(三三八)、浅井要麟氏前掲著(二六八)、日本思想大系9・『天台本覺論』(五〇九)を参照されたい。
- (15) 浅井円道氏前掲著(六三四)、日藏『解題三』(二二〇～二二三)を参照されたい。
- (16) 日藏『天台宗密教章疏三』(四二三)、なお特に卷一(四二三～四三〇)にその主張が顕著である。
- (17) 天全『解説』(三二～三三)、裕慈弘氏『日本仏教の開展とその基調(下)』(一一七)、『天台本覺論』(五三九・五四一)を参照されたい。
- (18) 天全九一四八
- (19) 天全九一四六
- (20) 浅井要麟氏前掲著(二六九)を参照されたい。
- (21) 天台本覺論(五四〇～五四一)を参照されたい。
- (22) 天全九一二八二
- (23) 日藏『解題二』(二九一～二九三)、注(21)を参照されたい。

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(二)(中條)

日朝の「本尊抄私記・見聞」の検討(二) (中條)

- (24) 天台本覚論(三・五五六)を参照されたい。なお身延山藏全四帖の中、日意所持本は第一・二・三が存で第四は欠、日朝所持本は第一・二が欠で第三・四が一冊本(第三・四との分巻はない)として存、外・内題に「修禪寺相伝私注」とある。ちなみに、『伝教大師全集』第五に収録されるものは、「修禪寺相伝私注」と「修禪寺相伝日記」とに大別されている。
- (25) 伝全五―一三二、なお日朝の所持本の二六紙裏にある。
- (26) 注(21)を参照されたい。
- (27) 天全九―五一
- (28) 浅井要麟氏前掲著(二七〇)を参照されたい。なお同抄には、例えば「衆生胸中蓮華。四仏四菩薩住玉。」(天全九―五三五)とか「蓮華三昧経云。宿命本覚心法身。常住妙法心蓮台。本来具足三身徳。三十七尊住心城」(天全五〇七―五〇八)の言がある。
- (29) 浅井要麟氏『昭和新增日蓮聖人遺文全集・別巻』(二八三)・前掲著(二七二―二七三・二七八―二八〇)、『日蓮聖人遺文辞典』(八六三)を参照されたい。
- (30) 浅井要麟氏前掲著『新脩遺文・別巻』(三二四)・前掲著(二七三)、前掲『遺文辞典』(四一九)を参照されたい。
- (31) 浅井要麟氏前掲著(二七三―二七四)を参照されたい。
- (32) 浅井円道氏前掲著(五三七―五四一)を参照されたい。
- (33) 注(32)参照
- (34) 宗全二三(例言一)、拙稿「金網集の一考察」(四三七―四三八「日蓮教団の諸問題」)を参照されたい。
- (35) 宗全一四―五四八(附録金網集第六別巻)に「真言五智四身事私云如余帖略之也」とあって、つづけて「本巻二五二頁一〇行ヨリ二五七頁六行ニ至ル全同」とある。
- (36) 宗全二三―三五六
- (37) 浅井円道氏前掲著(七四三―七四六)・「金網集と法華問答正義抄」(五五『大崎学報』一三五)を参照されたい。
- (38) 注(36)参照
- (39) 宗全一六―一四六―一四七
- (40) 宗全一六―二六九―二七〇
- (41) その他、宗全一六―二八四・三五二―三五三等も参照されたい。

(42) 注(39) 参照

(43) 日藏、天台宗密教章疏三(四二三)四二五・四二九を参照されたい。

(44) 宗全一六一二六九

(45) 注(44) 参照

(46) 宗全一六一二七〇

なお『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『日本大藏經』は日藏、『大正新脩大藏經』は大正藏經、『天台宗全書』は天全、『伝教大師全集』は伝全、とそれぞれ略称した。